



これも自然なのが

自然のつながりに ヒトは入れる

植物・動物に関わらず、すべての生き物はお互いに食べたり食べられたりの生活の連続です。この関係を「生態学的連鎖」といいます。鳥が草の実を食べたり虫を食べたりする、自然のためにならないよう見えますが、害虫の例でもあるように、増える生き物の自然にとってはマイナスで、これをうまくコントロールしているのが鳥たちだということができます。つまり、鳥たちの食べ物のがあり、そして鳥たちも他の動物に食べられるという状態が、自然豊かに保っていることになります。

食物連鎖は、自然界ではごく普通に行なわれているもので、とくにとりあげるほどの問題はありません。しかし、ひとたび人間が加わると、食物連鎖は、どうなるでしょう。

ヒトとゴミが 自然の連鎖を変え

ことしの夏も「自然」をうたう観光地に、たくさん的人がお出でになります。人が集まれば、それだけの受け入れ準備が必要になってきます。たとえば車道がひからげられ、道路はどんどんの中に分け入り、駐車場が増設され、休憩場や宿泊設備が拡大されます。すると自動車が増え、当然また人口が増加します。そしてまた人が集まれば——、どこに足を運んでも、人と車と道路の連鎖を見ることはできません。

「自然」に接して、日常生活からの開放感といった反動が加わると、ヒトはなぜ、節度を失ってしまうのでしょうか。緑の山にもうひとつゴミの山を築き、食べ残しを散らかし、植物を引抜き、土を奪うという目にあるまるやーの悪さ、これらからノネズミやドバネズミの異常な繁殖の原因となりやがて野犬やキツネ、テンなどが、山を登りはじめました。住みなれた山のふもとは、開発によって彼らのすみかでなくなり、本来は生息するはずのない高地へと移動してきました。

ゴミを残せば ライチョウが食われる

ライチョウは、登山客がたくさん山へ来る5月～10月頃が、一年でいちばん大変な季子を育てる時期にあたります。いま、ヒナは生後1ヵ月ほどになります。彼らの天敵は、昔はイリマシやクラゲなど、空から襲うのがほんんどでしたが、今は話題のように、登山客の残飯を自分で山へもたらす肉食のけものたちや、ヒヤカラスやアカハラが圧力をかけ、ライチョウの親鳥だけでなく、卵やセドも食べています。そして、今までには無菌で飼育だったライチョウの体内から、大腸菌なども見つかりました。

こうして高山の動物たちは、自然界の食物連鎖以外の敵によって、すでにその存在がおびやかされているのです。

ことしの夏も「自然」をうたう観光地に、たくさんの人が集まっています。

あなたは「ゴミを食べ残し」をどうしますか



ヒトの心の中に「トロ」の保護区

財団
法人 日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社

●この広告は、財團法人日本鳥類保護連盟の指導を得て
サンタリー株式会社がシリーズとして制作するもので